

20年後の本学の蔵書数 550 万冊

最近の図書の増加は著しいものがあるが、この15年間の本学の図書ののび方をみると、昭和27年度より34年度の平均年間増加率は2パーセント台であったが、35年度より42年度は大幅に上昇し、昭和43年3月末の蔵書数は270万冊を突破。最近5カ年間の平均増加率は4パーセント台を記録している。これは昭和41、42年度において、人文科学研究所の特別の受入図書が約12万冊あることにもよるが、それを除いた純増をみても、今後、多少の増減はあるとしても、平均3.4パーセントの増加率でいくものと推定される。推計では本学の蔵書数は20年後の昭和64年3月末には550万台を突破し、そのときの年間増加冊数は18万台（現在の約2倍）になると思われる。これらの図書の管理について改めて考える問題は多いようだ。

一方書庫の収容力は、昭和43年3月現在で16万2千冊の余裕しかもっていない。すでに8部局・研究所等でその収容力の限界をこえている。このように書庫収容力は切迫した現在の問題でもあるのだが、もし書庫スペースがこのままであるとすると、20年後には約280万冊の図書が収容の場所を失ってしまうことになる。将来の図書資料の形態がマイクロ化することも考えられるが、ここ20年の間ではやはり従来の形態が主力をしめるであろう。上記280万冊に対する必要な書庫面積は「国立学校建物の実態調査等に用いる必要面積一覧表」の基準によると閉架書庫で15,700m²となる。今後の本学の研究・教育の推進と密接不離の関係をもつこの膨大な図書資料を充分に収容する書庫建設について真剣に考えていかねばならない。

（注：昭和43年3月末現在 京都大学蔵書冊数2,726,071冊 同書庫面積12,591m²）

資料紹介

参考図書所在目録（和文編）～1968～ 日本私立大学協会編

この目録は全国の私立大学図書館のうち137館において、昭和40年7月現在所蔵している和文参考図書を収録した所在目録である。これは同協会によって、1963年と1964年の2回にわたって出版された「日本参考文献所在目録」（2冊）を礎石として編さんされたもので、人文科学、社会科学、自然科学の3編に大別され、巻末に書名索引がある。各項目内は書名（ゴシック）のアルファベット順配列である。所蔵している大学名は略称によって列記し同一地域間でまとめられている。

現在、財政的にも物理的にも何らかの制約のある各大学図書館で総ての参考資料を収集することは不可能である。そこで相互協力によって、参考図書の所在をはあくし、それを利用することにより、サービス面での機能も発揮できることになる。この意味からしてこの目録が完成されたことは意義が深い。

博士学位論文 内容の要旨および審査の結果の要旨

現在、京都大学 第1集～10集（昭和34～43）、東京大学 昭和38～42年度、大阪大学 第1集～9集（昭和37～43）の論文を所蔵している。本書は学位を授与した年度別に刊行されその内容は学部ごとに集められて、博士番号・論文題目・論文審査員に続き内容、結果の要旨が記載されている。

多くの先人の提出した論文要旨が見られるために今後博士論文を書く上に非常に参考になるものである。

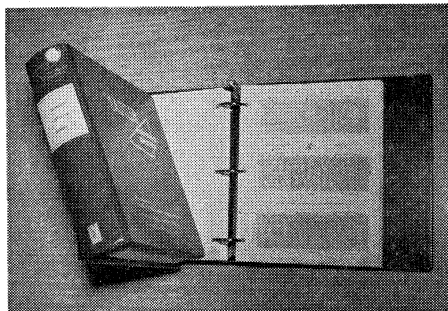
しかしこれは新制博士からの分で旧制博士は京都大学学位録（大正10～昭和26年）があるが学部別に論文名が載っている簡単なものである。

なお、本書は年度別になっているため学位を授与された年度が判明しない時、または特定の人の論文を探すときは京都大学の分は学部別に氏名順のカードがあるのでそれを利用するとよい。

本学の博士論文は本館に所蔵されて、閲覧は出来るが貴重書扱いになっている。

サトラー標準赤外スペクトル集について

Sadtler Standard Spectra, すなわちプリズム分光器による赤外域吸収スペクトル35,000格子分光器によるもの13,000のカードがこのたび図書館に設置されることになった。国立大学では本学がその嚆矢である由である。1968年までの発行分が、各種索引とともに特別戸だに収納され、本学一般の利用に供せられる。専門外のかたに、どのような効用のあるものか説明したいと思う。



吸収スペクトルというのは、その物質がいろいろな波長の光をどういう割合に吸収するかをグラフで示したものである。赤外域、なかでも波長2~15ミクロンにおける吸収スペクトルは、あたかもくしの歯のような複雑な模様を呈している。そしてその模様は物質に個有であって、その物質の“指紋”とみなしてさしつかえない。警察の元締めは膨大な指紋のコレクションをもっていて、事件のたびに犯人の割り出しに役立っているそうであるが、サトラー社の本カード集は全く同じような役割を、物質研究の上で果たしてくれるわけである。

5万に近いスペクトル図をいちいち照合しては時間がかかる。索引はそのため必須不可欠のもので、これをいかにもく使いこなすかが問題である。近く講習会を開いて利用者の便を計ろうという企てもあるよしである。

近年における革命的な学問の進歩は、科学を細分化するとともに、従来無縁であった学問領域が、いつの間にか非常に密接なかかわりあいをもつ状態をもたらしている。サトラー赤外スペクトルの全学的利用をひとつの機縁として、各部局でバラバラに行なわれていた図書室の活動が物によっては本部図書館中心に集約され、むだがなくて便利なものに変革されるべきではないか。少なくともその方向への第一歩をふみ出す時期のきていることを痛感する。

(工学部工業化学教授 野崎 一)

教 官 文 庫

- 「簿記の一般理論」高寺貞男(経済学部助教授)著 ミネルヴァ書房 昭42.
- 「非線形問題」占部実(数理解析研究所教授)著 共立出版 昭43.
- 「ローマ裁判制度研究」柴田光蔵(法学部助教授)著 世界思想社 昭43.
- 「明治維新の分析視点」上山春平(人文科学研究所教授)著 講談社 昭43.
- 「弁証法の系譜」上山春平(人文科学研究所教授)著 未来社 昭43.
- 「日本経済史読本」堀江保蔵(名誉教授・経)著 東洋経済新報社 昭43.
- 「平和の思想」湯川秀樹(基礎物理学研究所教授)編 雄渾社 昭43.
- 「国際法講義 上」田畑茂二郎(法学部教授)著 有信堂 昭43.
- 「家族法判例集成 追録Ⅲ」太田武男(人文科学研究所助教授)編 昭43.
- 「新修 京都叢書 第5」野間光辰(文学部教授)編 臨川書店 昭43.